

勧誘表現「～マイカ」の衰退

——狂言台本を資料として——

永田里美

キーワード：勧誘表現、否定疑問文、モダリティ、分析的傾向、狂言台本

要 旨

勧誘表現を「話し手の行為遂行を前提とし、聞き手もその行為に参加させようとする働きかけの表現」とすると、中世末期にはこのような意味機能を担う一文末形式として「～動詞+マイカ」の存在が認められるが、近世後期、江戸語などでは衰退している様子が窺える。本稿は「～動詞+マイカ」の衰退にみられる勧誘表現形式の変遷について、書写年代の異なる二種の狂言台本（虎明本 1642 年、虎寛本 1792 年）の比較を手がかりとして、以下のような解釈を試みた。

勧誘を表す「～マイカ」は「(否定疑問による) 聞き手への働きかけ」が「意志」と複合したモダリティ形式であったと考えられるが、近世の時期、「～ウ+デハナイカ」あるいは「～ウ+カ」のように各々の機能を分析的に表した形式へと移行してゆくことがわかる。こうした勧誘表現形式の変遷は近代語の形成過程における分析的傾向の一現象であるといえる。

1. 問題の所在

1.1. 虎明本と虎寛本の詞章比較

勧誘表現の定義を「話し手の行為遂行を前提とし、聞き手もその行為に参加させ

ようとする働きかけの表現^{*1}とすると、狂言台本虎明本^{*2}にはこのような意味機能を担う一文末形式に「～動詞+マイカ」が存在する。(以降、文末に「～マイカ」が現れる勧誘表現形式のうち、「～動詞+マイカ」を「～マイカ」、「～動詞+ウデハアルマイカ」を「～ウデハアルマイカ」と記す。また、煩瑣を避けるために勧誘表現形式を勧誘形式と呼ぶこととし、特にことわらない限り「～マイカ」は勧誘用法のものを指すことにする。)

(例 1) (孫一) さりながら是ほどめでたひ事はあるまひ程に、いざあの体を、はやし物にしてもどるまひか (孫二) それこそよからう、いざあのうわぎをとつて、はやし物でいなふ (虎明本上「葉水」111頁)

一方、同流派の狂言台本である虎寛本^{*3}には、勧誘を表す「～マイカ」という形式は見えず、虎明本と対応する詞章において以下のような形式にあらためられている。

(例 2a) (男一) 去年の十月一日 (男一) 是はわたしまの連歌じやあらふ (男二) さやうであらふ (男一) 水に見て、月のうへなるこのはかな (男一) 是にさらは、そへ発句をせまひか (男二) 尤もじや、是までくるもすいたゆへじや、此やうな所では、こちがやうな者にはさせまひ (虎明本下「連歌盗人」27頁)

(例 2b) (アド) 心得た。十月一日。水に見て月の上成木の葉かな。木の葉哉。是は先月移徙が有たが、其時の発句で有う。(アド) いか様其時の発句で有う。(シテ) 扱身共がおもふは、そなたや某が分として、此様な結構な座敷で連歌をする事は成まい程に、此に添発句をせうでは有るまいか。(アド) 是は一段と能らう。(虎寛本下「連歌盗人」190頁)

*1 本稿は一・二人称が動作の主体となる働きかけを勧誘とし、二人称が動作の主体となる場合を勧奨と称する。

*2 大蔵弥右衛門虎明写(1642年)。所収曲 237 番。引用本文は池田廣司・北原保雄著『大蔵流虎明本狂言集の研究 上・中・下』表現社(1972～1983)による。なお謡、万集類など文体差を有するものおよびは調査対象から除外する。

*3 大蔵弥右衛門虎寛写(1792年)。所収曲 165 番。引用本文は笹野堅校訂『大蔵流虎寛本能狂言 上・中・下』岩波文庫(1942～1945)による。

(例 3a) (貸手) 誠にあれには、連歌にすかれたときひたが、終にきいた事がなひ、
はいかひ連歌を、おもて八句あそばすまひか (借手) 私が仕ると申て、ふ
 かしひ事では御ざらね共、とかくすいては御ざる… (略) …
 (虎明本下「八句連歌」103頁)

(例 3b) (アド) イエ、懐紙に付て思ひ出いた。そなたは何れもの初心講に交つて
 推参をいふと聞たが、誠に。(シテ) イヤ、左様の事は致しませぬ。(アド)
 な隠しそ。口が能いと聞た。表八句なりと致うか。(シテ) 一段と能う御座ら
 う。
 (虎寛本下「八句連歌」273頁)

(例 4a) (太郎冠者) 皆何と思ふぞ、木をはこぶも是斗也、大儀な御ふしんも大か
 たすむ、是はめでたひ事じや程に、いざはやし物をしてもどるまひか (次
 郎冠者) 一段よからふ、… (略) … (虎明本上「三本柱」101頁)

(例 4b) (太郎冠者) 扱某がおもふは、山へ来るももはや今日が仕廻ひで有う程に、
目出たう囃子物をして戻らうとおもふが、何とで有うぞ、(次郎冠者) 是は一
 段と能らうが、何といふてはやすぞ。 (虎寛本上「三本柱」119頁)

このように勧誘形式「～マイカ」は虎寛本には存せず、他の形式にあらためられて
 いる。後述するように、助動詞「マイ」自体の衰退に鑑みると勧誘形式「～マイ
 カ」の衰退も容易に想定されるのであるが、ここで注目されるのは、「～マイカ」
 の諸用法の中でも、殊に勧誘用法の衰退が目立つということである。例えば、虎
 明本における依頼、勧奨などを表す働きかけの「～マイカ」は虎寛本においても認
 められるのである(用例中／＼は躍り字を示す。／＼については以下同様である)。

(例 5a) (船頭) 今から爰もとを節々とをらせられうず、お知る人になりませう
 ほどに、ちと御酒をひらかせられまひか、こなたも一つまいると見えたが
 (虎明本上「船渡聲」361頁)

(例 5b) (船頭) 何とさ、へをたゞ一つ振舞て被下まいか。(シテ) 安い事では御
 ざれども、… (略) … (虎寛本中「船渡聲」253頁)

(例 6a) (武悪) 某がいつもとつて上る、いけすほどな所が、有さあらはそれをと
 つてあげふが、まつ一はいのむまひか。(太郎冠者) いや／＼さやうにしては
 おそからふ、いそひでゆかしめ (虎明本上「武悪」307頁)

- (例 6b) 幸浦に生州ほどの所が有るが、是に魚がおびたゞ敷う有る。取て上うほどに、先内へいつて一ぱいのむまいか。(冠者) いや／＼、内もいそがしい程に、早う取て上さしめ。 (虎寛本上「武悪」354 頁)

1.2. 中世末期から近世後期に現れる勧誘形式：「～マイカ」の衰退

このような虎明本と虎寛本の間にもみられる勧誘形式「～マイカ」の現れ方の相違は、例えば、近世前期の近松門左衛門による浄瑠璃集に「～マイカ」がみられるのに対して、近世後期の十返舎一九による『東海道中膝栗毛』では中部方言を話す人物にのみ「～マイカ」が用いられるに過ぎなくなるという、近世日本語での変化を反映したものであると考えられる。以下にその用例を示す*4。(※印は本稿の筆者が補った。なお※に関しては以降、同様である。)

- (例 7) 女郎「ア、いかう気がめいる。わつさりと浄瑠璃にせまいか。禿ども、ちよつと行て、竹本頼母様借つて来い。」

(近松門左衛門「冥土の飛脚」初演 1711 年)

- (例 8) 太兵 (※三河国の客)「ヲツとうけた。ひゆつとやりからかいて、これから門もつこうへもどろふまいか。但しは枩屋か、てうじやへいこうまいか*5。」

(『東海道中膝栗毛』四篇下 1802～1809 年)

また、(例 2b) (例 3b) に挙げた虎寛本における「～ウデハアルマイカ」、「～ウカ」は以下の表が示すように、虎明本では用いられていない勧誘形式であることがわかる*6。

*4 『近世文学索引 近松門左衛門』(教育社、1986) に所収されている世話物 12 篇を検索、引用本文は『日本古典文学全集 近松門左衛門集 一・二』(小学館)による。また、『東海道中膝栗毛』の引用本文は日本古典文学大系(岩波書店)による。

*5 「動詞ウ+マイカ(戻ろふまいか等)」のウについては湯沢(1936)による音韻的要素の現れとみる説と、奥村(1969)のように助動詞ウの現れとみる説とがある。

*6 (例 4b) に挙げた「～う(と思ふ)が何と有うぞ」という表現に関しては虎明本にも見受けられる。(例)「それでこそ聞えたれ、うりつけた物をうらねははるし、合点いたひた、其儀ならば拍子にあわせてうらふが何とあらふぞ」(虎明本上「煎じ物」118 頁)

表 1. 中世末期～近世後期に現れる勧誘形式

（表中、○は勧誘形式として用例が存在するもの、×は用例が見出せないものを示す。※ 1 藤栗毛の「～マイカ」は先述の通り位相差を有していることを示す。※ 2 虎寛本における～ヌカは勧誘用法の解釈が強い*7。）

文献（成立年代）/形式	～ウ	～マイカ	～ウデハ アルマイカ	～ウデハナ イカ	～ウカ	～ヌ/ナイ カ
虎明本(1642)	○	○	×	×	×	×
近松浄瑠璃集(1703～22)	○	○	○	×	×	×
江戸笑話集*8(1772～98)	○	×	○	○	×	×
c.f.虎寛本(1792)	○	×	○	○	○	※2
藤栗毛(1802～09)	○	※1	×	○	○	○

このように、勧誘形式「～マイカ」は少なくとも、中世末期から近世前期には存在したと考えられるが近世後期、江戸語などでは衰退している様子が窺える。また表 1 からは「～マイカ」の衰退に対して、「～ウ」は各文献を通して認められることや、「～ウデハアルマイカ」「～ウデハナイカ」「～ウカ」など、「ウ」を用いた勧誘形式が優勢であるということも読みとることができる（以下、「～ウデハアルマイカ」「～ウカ」をまとめて「～ウ」タイプの勧誘形式と称する）。従来の研究では「マイ」の史的跡付けはなされてきたものの、「マイ」によるこのような語法の史の変遷については言及されてこなかった。また、勧誘表現の史の変遷を体系的に考察した研究も管見の限りないようである*9。

*7 虎明本と虎寛本を比較すると、「～ヌカ」の勧誘（二人称主体）用法（虎明本 1 例→虎寛本 13 例）が増加するなど、「～ヌカ」が働きかけの形式として発達している様子が窺える。しかし、勧誘（一・二人称主体）用法に関しては虎寛本に反映されているとはいえない。「～ヌカ」の働きかけとしての発達過程については別稿に譲る。

*8 「江戸笑話集」は日本古典文学大系（岩波書店）に収められている「鹿の子餅」「聞上手」「鯛の味噌津」「無事志有意」をまとめて記したものである。

*9 否定疑問文の歴史の変遷については山口（1991）がその表現性に着目して俯瞰的にまとめしており、否定疑問文と推量の助動詞との関わりに目を向けた興味深い考察を行っているが、主に考察対象とされているのは認識的判断に関わる否定疑問文であり、勧誘表現のような行為要求を現す否定疑問文については断片的な記述がなされているのみである。

本稿はモダリティ^{*10} という観点から否定疑問文の史的跡付けを行う、という構想の一環として、勧誘形式「～マイカ」の衰退に関する考察を行おうとするものである。本稿では特に勧誘形式「～マイカ」の衰退と共にみられる勧誘表現の体系上の変化という面に着目し、狂言台本の比較を手がかりとして、その一端を明らかにすることを試みる。具体的には、上述した勧誘形式「～マイカ」の衰退と「～ウ」タイプの優勢化との関連性について言及することとなる。次節では、最初に先行研究によって説かれている「マイ」の史の変遷を確認した上で、本稿の方策を述べることにする。

2. 助動詞「マイ」の史の変遷について

広く知られるとおり、「～マイカ」を構成する「マイ」は、マジ>マジイ>マイという変化をへて成立した助動詞であり、中世初期の文献にはその存在が確認されている^{*11}。意味としては意志・推量の打ち消しを表していたが、近代語の形成過程で衰退の途をたどることになる。この「マイ」の変遷に関して、これまでの研究では主に「近代語の分析的傾向」との関わりが指摘されている。例えば、奥村(1969)は以下のように述べている。(※下線部は本稿筆者による。)

なお、最近では、その不変化語形「まい」が急速に衰えつつあり、「ナイダロウ」「ナイデオコウ」「ナイツモリダ」のごとき、打ち消しと、推量・意志とを分析した表現形式が代用される傾向にある。これについては(イ)分析的傾向を好む近代語の一般的特性、(ロ)「まい」が用法的に限られ、特に、待遇表現などにあずかりがたいことなどの事情が考えられる。

(奥村(1969) 238頁)

また、吉田(1971)も「マイ」について以下のように述べ、この形式が「「ないつもりだ」などの表現形式に拡散してゆく(同論文 314頁)」という旨の記述を行っている。

*10 本稿では話し手の心的態度(主体的表現)をモダリティとし、それを具体的に表す形式をモダリティ形式と称する。

*11 大塚(1962)参照。

「まい」は主体の否定する意志、つまり打ち消しにおける強い決意を表す。話し手または登場人物の〈拒否〉の心理を示すのであるから、この「まい」は「ない」に相当するようだが、「ない」では意味が弱くなるか、あるいはどこちない感じで、置き替えはあまりできない。（吉田(1971) 309 頁）

このように先行研究によって「マイ」の史的跡付けは行われているものの、これらの指摘のみでは勧誘形式「～マイカ」の変遷を辿ることは困難であると思われる。

たしかに奥村(1969)が指摘するように「近代語の分析的傾向」が「マイ」に及ぼした影響は大きいものと考えられるが、「～マイカ」に関しては「～ウ」タイプの勧誘形式との間にどのような関連性が見出されるのか、ということに対し、先行研究のみでは十分な説明が与えられない。従って、勧誘形式「～マイカ」の変遷については「マイ」の史的変遷という語の問題だけではなく「～マイカ」という語法上の問題として捉えてゆく必要があると考える。

そこで次節では「～マイカ」のモダリティとしての機能を明らかにし、中世末期における勧誘形式「～ウ」「～マイ」の有する機能との相違を述べる。続く第4節ではこれらの考察をふまえた上で虎寛本にみられた「～ウデハアルマイカ」「～ウカ」と「～マイカ」の間にどのような機能上の類似性が見い出されるのかということに言及する。最後にこうした勧誘形式の変遷が、日本語史上、どのように位置付けられるのかということにふれることとする。

3. 「～マイカ」におけるモダリティとしての機能

3.1. 否定疑問文の「偏り」について

本節では勧誘形式「～マイカ」の考察を行う前に、否定疑問文の「偏り^{*12}」という現象に目を向け、「～マイカ」が働きかけ^{*13}（勧誘、勧奨、願望など）として解釈される理由について述べることとする。

最初に虎明本における以下の用例に着目してみる。

*12 否定疑問文の有する「偏り (bias)」については太田(1980)など参照。

*13 働きかけとは「話し手が相手たる聞き手に自らの要求に沿った動きの実現を訴えかけ、働きかけるといった発話伝達のモダリティ (仁田 1991, 299 頁)」、また後述する問いかけとは「話し手が聞き手に情報を求める発話伝達の態度 (仁田 1991, 46 頁)」に従う。これら「問いかけと働きかけ」の近似性・共通性についても同著に多くを負っている。

(例 9) (太郎冠者) 誠にいかふおもひほどに、此文の内に何事が有ぞ、いざひろげて見まひか (二郎冠者) 余おもひほどに、さらはひろげて見う (太郎冠者) さあおろさしめ (二郎冠者) あゝたすかりや (※ト書き ふみをみる)
(虎明本中「文荷」113頁)

(例 10) (山賊) 何事ぞとはにくひ事をぬかす、その道具をおいてゆけ (女) なふきやうこつや、是はわらはが一跡にておりやらしませ、こらへておくりやれ (山賊) しかとおくまひか、おかずは長刀にて、どうぼねを二つになひてくれふ。
(虎明本中「瘦松」293頁)

上記の(例 10)の「～マイカ」が「どうしても～するつもりはないのか」という否定意志の有様を聞き手に問うているのに対し、働きかけの意を有する「イザ^{*14}」を伴った(例 9)の「～マイカ」は(例 10)ほど否定意志の意味が強く現れない。こうした(例 9)のように「～マイカ」が否定意志の有様を問いかけるというよりはむしろ、働きかけの表現として機能するのは否定疑問文の有する「偏り」によるものと考えることができる。

すなわち以下に示すように、虎明本には聞き手の意向を問う表現形式として、肯定疑問文に「～ウカ」が、否定疑問文に「～マイカ」が用いられている。このうち、「～ウカ」と「～マイカ」が並立して用いられる場合(例 11)、あるいは「～ウカ」が単独で用いられる場合(例 12)(例 13)には中立的に聞き手の意向を問う表現となる。

(例 11) (通行人) おこさずはきるぞ (大名) 男の一腰はやりはせまひぞ (通行人) おこしよかおこすまひか (大名) やらふ／＼
(虎明本上「二人大名」281頁)

(例 12) (茶屋) 茶をおまいらふか (出家) のどがかわきまらする一ふくくだされひ (茶屋) やすひ事おまいれ
(虎明本中「薩摩守」310頁)

(例 13) (検断) さあらは身が思ふは、此事につけて、歌を一首つゝよませて、そ

*14 虎明本には124例の「イザ」が存する。それら文末には勧誘表現58例、自己の意志表明39(うち、勧誘とも解釈が可能なもの14)例、命令表現24例がみられる。

のうへで言ひつけうと思ふが、汝はよまふか (畠主) 中々よみませう
(虎明本下「竹の子」86頁)

一方、次の(例14)(例15)のように単独で用いられる「～マイカ」は、聞き手に対する働きかけの表現として解釈される場合が多い。このことは太田(1980)も述べるように「より複雑な否定疑問文の方が有標となる(624頁)」からであると考えられる。

(例14) (冠者) ふじのみきがござるが、参るまひか (大名) それはよからふ
(虎明本上「富士松」253頁)

(例15) (大名) それならばなんぞかへものにはせまひか (太郎冠者) それはもの
によつて仕らふ (虎明本上「富士松」252頁)

このように、「～マイカ」には否定意志の有様を問いかけるタイプのもので、否定疑問の成分が働きかけとして機能するタイプのものが見出される。そしてこれら二種の否定疑問文は以下のように解釈することができる。

(a) 否定意志の有様を問いかけるタイプ

「～マイカ」: 否定意志マイ + カによる聞き手への問いかけ

(b) 否定疑問が働きかけとして機能するタイプ

「～マイカ」: 意志+ 否定疑問による聞き手への働きかけ (が複合している)

3.2. 虎明本における勧誘形式の体系からみた「～マイカ」

そこで前節で述べた働きかけとして機能する「～マイカ」と、虎明本における他の勧誘形式との相違をみてゆく。虎明本における勧誘形式には「～マイカ」の他、「～ウ」「～マイ」がみられる。ただし「～ウ」に対する否定用法(制止表現)である「～マイ」は孤例であり、虎寛本にも見出されない。従って「～マイ」については本節で参考までに掲げるに留める。最初にこれらの機能上の相違を示す。

(c) 「～マイカ」の勧誘表現としての機能

「～マイカ」: 意志+ 否定疑問による聞き手への働きかけ (が複合) (b再掲)

(d) 「～ウ」の勧誘表現としての機能

「～ウ」: 意志 + 表出性による聞き手への働きかけ

(e) 「～マイ」の否定的勧誘表現（制止表現）としての機能

「～マイ」: 否定意志 + 表出性による聞き手への働きかけ

勧誘形式「～マイカ」が、働きかけという発話伝達に関わるモダリティと意志の表現とを複合せた形式であるということは前節で述べたとおりである。他方、「～ウ」、「～マイ」は聞き手への働きかけが「表出性」によって担われていると考えられる。この「～ウ」「～マイ」には独話用法における自己の意志表明という用法や話し手の行為提供という一人称主体の用法が存在し^{*15}、これらが勧誘表現として用いられた場合には、その「表出性」によって聞き手を行為の参加に引き込もうとする働きがみられる^{*16}。

・「～ウ」による勧誘表現

(例 16) (通行人一) 其柿はどこへぞ音信にもて行か、又うるかきか (柿売) 中々都へしやうばいに参る (通行人一) 一段の事じや、いざ是をかうてたべう (通行人) よふござあらふ (虎明本下「合柿」63頁)

・「～マイ」による話し手の否定的勧誘（制止）表現

(例 17) (※ト書き 山賊が) 互いになく、さて中なをりをして、いらぬ事じやい

*15 用例を挙げておく。なお「～マイカ」にはこのような用法は見出されない。

・「～ウ」による話し手の意志表明 (例) (目代) 罷出たる者は、目代で御ざる、… (略) 一のくひにつなひだる者を、末代一のくひにつけさせられうずるとのおことでござる、いそひでせいさつをうたふ (してばしらにうつまねをする) (虎明本上「牛馬」120頁)

・「～ウ」による話し手の行為の提供 (提案) (例) (松脂) 某ねつてしんぜう (主) それはなを／＼よからふ、さらば是へおでやれ (虎明本上「松脂」105頁)

・「～マイ」による話し手の否定意志表明 (例) (※太郎冠者の独言) 此度はくるしからね共、後のためじや、何ぞさくびやういたひて参るまひ (虎明本「しびり」99頁)

・「～マイ」による話し手の行為の拒否 (例) (※雁を奪い合う場面) (太郎冠者) 身共もにあひの主をもつた、そのやうなきこえぬことばをおしやるものか なかなかき、まらすまひ (大名) きくまひというておのれがなにとせうぞ (虎明本上「雁盗人」170頁)

*16 「表出性」によって聞き手を行為の参加に引き込むという捉え方は安達 (1999) から影響を受けている。

ざしぬるまい、もつ共じや、(謡) 思へは無用のしになりと、／＼、ふたりの
 者は中なをり、(略) … (虎明本下「文山立」54頁^{*17})

4. 勧誘表現の体系上の変化について

4.1. 勧誘形式の分析的傾向

では、中世末期における「～マイカ」が担っていた機能は近世前期から後期にかけて、どのような形式によって表されるようになるのだろうか。すでに第1節では、近世の時期における勧誘形式の史的变化として「～マイカ」の衰退がみられることに対し、「～ウデハナイカ」「～ウカ」など「～ウ」タイプの形式が優勢になるということを指摘した。これまでの考察をもとに、こうした「～マイカ」と「～ウ」タイプの勧誘形式との間にみられる関連性に対して、本稿の見解を述べると以下のようになる。

最初に、本稿が導いた結論を先に述べると、これら「～ウ」タイプの形式は「～マイカ」の有していたモダリティとしての機能「意志と聞き手への働きかけ」を形式として「意志」と「聞き手への働きかけ」のように分析化させたものであるとみなすことが可能である。表2は、各々が有する機能が分析的に表されている様子をまとめたものである（「～ウデハアルマイカ」については後述する）。近世後期の口語的資料にみられる用例と共に以下に示す^{*18}。

表2. 勧誘表現の形式と機能

形式/モダリティ	意志	聞き手への働きかけ
c.f. マイカ	マイカ (否定疑問による聞き手への働きかけが意志と複合)	
ウデハナイカ	ウ	デハナイカ
ウカ	ウ	カ
ウ	ウ	(表出性)

*17 なお虎寛本の「文山賦」では該当箇所が以下のようになっている。「誠に和御料と身共さへ中を直れば濟事じや程に死ぬる事はやめにせう。迎の事に目出度く此事を謡ふて戻らう。」

*18 虎寛本においてもこれら「～ウ」「～ウデハナイカ」「～ウカ」による勧誘用法が見出される。

・「～ウデハナイカ」

(例 18) 喜多八「時に弥二さん、おめへとんだふさぐの。ナントいつばい呑ふじやアねへか。」弥二「それもよからふ。」

(『東海道中膝栗毛』五篇)

・「～ウカ」

(例 19) 弥二「ナントきた八、京からさきへ見物するつもりで来たが、いつそのと、此舟からのつて大坂からさきへやらかそふか」喜多八「それもよからう」

(『東海道中膝栗毛』六篇上)

(例 20) 京の男「ナントこよひ、これから古市へいこかいな。」弥二「まだ宮めぐりもせぬさきに、もつてへねへよふだが、まゝのかは、やらかしやせう。」

(『東海道中膝栗毛』五篇)

・「～ウ」

(例 21) おたこ「いも七さん、わつちらもおひらきにいたしやせう。」いも七「それ／＼、此せまいうちに長居はおそれだ。…(略)」

(『東海道中膝栗毛』発端篇)

上記の表中、「～ウデハナイカ」を「～ウ+デハナイカ」のように分析した理由についてはなお記述が必要であると思われる。「～ウデハアルマイカ」の解釈とともに次節でふれることとする*19。

4.2. 「～ウデハアルマイカ」、「～ウデハナイカ」の成立

まず、「～ウデハアルマイカ」、「～ウデハナイカ」の用例数とその分布の様相をまとめた表を以下に示す*20。

*19 「～ウカ」を「～ウ+カ」と分析することについては異論が無いと考える。「～ウカ」の考察は「～ウデハナイカ」との用法上の接近という側面から別稿で論ずることとする。

*20 北原保雄編『きのふはけふの物語研究及び索引』笠間書院(1972)、鈴木棠三校注『醒醉笑』岩波文庫(1986)、近松は前注、その他は日本古典文学大系の本文を調査した。

表3. 「～ウデハアルマイカ」「～ウデハナイカ」の用例数とその分布

文献（成立年代）/用例数	～ウデアルマイカ	～ウデハナイカ
きのふはけふの物語 1615年	0	0
醒醉笑 1623年	0	0
虎明本 1642年	0	0
近松淨瑠璃集 1703～1722年	1	0
遊子方言 1770年	0	2
鹿の子餅 1772年	1	0
聞上手 1773年	0	1
鯛の味噌津 1779年	0	3
心学早染草 1790年	0	1
c.f.虎寛本 1792年	7	6
東海道中膝栗毛 1802～1809年	0	17
春色梅児誉美辰巳園 1832～1833年	0	5
用例数合計	9	35

表3から、これらの形式が近世中葉から文献に現れ始めるものであることが理解される。また、「～ウデハアルマイカ」と「～ウデハナイカ」の間には以下に示すように、位相差もみられず、その意味合いの差異も見出されない。

(例22) (茂兵衛)「ハテなんとせう。今までが不思議の命、されども、父様、母様の嘆きのほどがおいとしい、一日でも存へるが孝行、今夜のうちに退かうではあるまいか」おさん「いかにも／＼。…(略)…」

(近松「大経師昔暦」初演1715年)

(例23)「さて徳兵衛と十兵衛、米が高くて蕎麦きりも合はぬ／＼と言たが、夕部から内へもどらぬといふ事じゃ。…(略)何にもせい可愛いこつた。どうで歩く夜道、手／＼に呼んでやろうじやあるまいか」「いかにもそれがよからふ」

(「鹿の子餅」1772年)

(例24) 二三人よりあひ、「なんと芥子あへをして食はふではないか」「ヲ、よからう。しかし芥子は腹をたつてか、ぬときかぬから、お主むつとしてかきやれ」

(「鯛の味噌津」1779年)

(例 25) (喜多八)「時に弥次さん、おめへとんだふさぐの。ナントいつばい呑ふじやアねへか。」弥次「それもよからふ」 (『東海道中膝栗毛』1802 年)

そこで「～ウデハアルマイカ」「～ウデハナイカ」がどのような過程を経て成立したのかが、問題となると思われるが、本稿はこの時期にみられる活用語に接続する「～動詞+デハナイカ」というモダリティ形式の発達^{*21}が「～ウデハナイカ」を成立させたものとする。既に山口(1984)においても断片的に述べられているように、否定疑問文「～ヌカ」、「～ナイカ」は近現代語に至って「確認形式の分析化してゆくさま(61頁)」がうかがえる。このような傾向は狂言台本においても確認され、また「～マイカ」を考察する上でも示唆的であるとする。例えば以下に示すように、虎寛本では「～動詞+ヌカ」によって表されていたモダリティ形式が虎寛本では「～動詞+デハナイカ」という形式にあらためられている詞章が存在する。

(例 26a) (告げ手) 女ばう衆といひ事はさせられなんだか (男) あまりにきずいにあたつた程に、ちとならはおひておじやる (虎寛本中「髭槽」274頁)

(例 26b) (告て) 承ればこなたは御内儀と喧嘩を被成たでは御ざらぬか。(シテ) 喧嘩と申程の事では御座らぬが、余り口ごはな事を申たに依て、一つ二つならはかいて御座る。(虎寛本中「髭槽」511頁)

このような傾向に照らし合わせると、モダリティ形式「～動詞ヌカ」から「～動詞デハナイカ」への移行と同様、勧誘形式「～マイカ」も助動詞「ダ(デ)」を承けた文末形式「～ウデハナイカ」に移行したと考えることが可能である。近松作品などにみられる「～ウデハアルマイカ」は「～マイカ」から「～ウデハナイカ」への移行における過渡的形態として解釈することができるのではないか^{*22}。

*21 このような文末形式「～デハナイカ」の発達に関しては小林(1995)でその史的考察を行った。なお、このように「～ウデハアルマイカ」に移行したのは勧誘用法の「～マイカ」であり、他の行為要求表現(勸奨など)には「～マイカ」から「～ヌカ」へと移行したと考えられるものもある。

*22 虎寛本では同曲内に「～ウデハアルマイカ」「～ウデハナイカ」が使用されているという例もみられる。なお、同流派の山本東本(日本古典文学大系『狂言集』)では「～ウデハアルマイカ」は存せず「～ウデハナイカ」が用いられているなど、狂言台本における「～ウデハアルマイカ」の位置付けについては「～マイカ」の諸用法の跡付けと共に、なお考察を要すると思われる。別稿に譲る。

こうして勧誘を表す「～マイカ」は、それが有していたモダリティとしての機能を「|肯定意志：ウ| + |聞き手への働きかけ：デハナイカ/カ|」というように、分析的な形式で表すようになったことが確認されたと思われる。このような勧誘形式の変遷は「近代語の分析的傾向」にもなじむものであったといえる。

5. むすびに

以上、勧誘を表す「～マイカ」の衰退と近世の時期に優勢となる「～ウ」タイプの勧誘形式との関連性について述べてきた。本稿は「～マイカ」が有するモダリティとしての機能を確認し、それらが形式上、分析的に表現されてゆく様子を跡付けした。そしてこのような表現形式の変遷は、近代語の分析的傾向という日本語史上の流れに沿うものであることを指摘した。

ただし、本稿はこれらの論拠を狂言台本という資料にもとめたものであるから、さらに調査資料の範囲を広げることが必要であると思われる。関連する問題として、「～マイカ」の諸用法の史的变化を見直し、本稿でみてきた勧誘用法の衰退がその中でどのように位置付けられるのかということの他、働きかけとしての「～ヌカ/ナイカ」の発達過程、方言における「～ウ+マイカ（行こうまいか等）」の位置付け、狂言台本諸本における詞章の異同等を確認する必要がある。いずれも今後の課題としたい。

参考文献

- 安達太郎(1991)「いわゆる「確認要求の疑問表現」について」『日本学報』10 大阪大学
 安達太郎(1995)「シナイカとシヨウとシヨウカー勧誘文—」『日本語類義表現の文法
 単文篇』くろしお出版
 安達太郎(1999)『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
 井上優(1994)「いわゆる非分析的な否定疑問文をめぐる」『国立国語研究所報告 107
 研究報告 15』
 太田朗(1980)『否定の意味』大修館書店
 大塚光信(1962)「助動詞マイの成立について」『国語学』50
 奥村三雄(1969)「打ち消しの推量の助動詞」松村明編『古代語現代語助詞助動詞詳説』
 第七章 学灯舎

- 北原保雄 (1981) 『日本語助動詞の研究』 大修館書店
- 国立国語研究所 (1960) 『国立国語研究所報告 18 話ことばの文型 (1) - 対話資料による研究 -』 秀英出版
- 小林 (永田) 里美 (1995) 「否定疑問表現形式の研究」平成 7 年度筑波大学第一学群人文学類卒業論文
- 重見一行 (1988) 「「む」は「推量」か」『国語国文』57-2
- 信太知子 (1976) 「準体助詞「の」の活用語承接について—連体形準体法の消滅との関連—」『立正女子大國文』5
- 信太知子 (1987) 「『天草本平家物語』における連体形準体法について—「覚一本」との比較を中心に消滅過程の検討など—」『近代語研究』7 武蔵野書院
- 田野村忠温 (1988) 「否定疑問文小考」『国語学』152
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 蜂谷清人 (1975) 『狂言台本の国語学的研究』笠間書院
- 森山卓郎 (1990) 「意志のモダリティについて」『阪大日本語研究』2 大阪大学文学部日本学科
- 山口堯二 (1984) 「疑問表現の否定」『国語と国文学』61.7 (山口 1990 所収)
- 山口堯二 (1990) 『日本語疑問表現通史』明治書院
- 山口堯二 (1991) 「推量表現の史的変容」『国語学』165
- 山崎久之 (1961) 「室町時代の待遇表現の記述的研究—古本狂言集について—」『群馬大学紀要 人文学部篇』10 群馬大学
- 湯沢幸吉郎 (1936) 『徳川時代言語の研究』(風間書房 1982)
- 吉田金彦 (1971) 『現代語助動詞の史的研究』明治書院

(2000年6月22日 受理)